

令和4年3月9日

令和3年度（第72回）芸術選奨文部科学大臣賞 及び同新人賞の決定について

文化庁では、昭和25年から毎年度、芸術各分野において、優れた業績を挙げた方、又は新生面を開いた方に対して、芸術選奨文部科学大臣賞、同新人賞を贈っています。この度、本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

1. 趣旨

芸術各分野において、優れた業績を挙げた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞を贈ることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

2. 部門・贈賞

演劇、映画、音楽、舞踊、文学、美術、放送、大衆芸能、芸術振興、評論等、メディア芸術の11部門にて実施。受賞者には賞状と、大臣賞には30万円、新人賞には20万円の賞金が贈られます。

3. 贈呈式

3月15日（火）都内ホテルにおいて行います。

※取材を希望される場合には、事前登録をお願いします。下記の担当まで御連絡ください。

※贈呈式の詳細な時間、場所については事前登録の御連絡を頂いた際にお知らせします。

（セキュリティーの都合上、贈呈式の詳細な時間、場所については、式終了後まで公表しないようにお願いします。）

＜担当＞文化庁参事官（芸術文化担当）付
参事官：山田 素子（内線2822）
参事官補佐：堀内 威志（内線2084）
文化創造係：久保野谷 春香（内線4782）
電話：03-5253-4111（代表）
03-6734-4776（直通）

令和3年度(第72回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：16名 文部科学大臣新人賞：12名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	タケモト チトモダユウ 竹本 千歳太夫	人形浄瑠璃文楽太夫	「ひらかな盛衰記」ほかの成果
		マキノ ノゾミ	劇作家、演出家	「昭和虞美人草」の成果
	新人賞	オノエ ショウロク 尾上 松緑	歌舞伎俳優・日本舞踊家	「土蜘蛛」ほかの成果
映画	大臣賞	エガワ エツコ 江川 悦子	特殊メイクアーティスト	「信虎」「マスカレード・ナイト」の成果
		ハマグチ リュウスケ 濱口 竜介	映画監督	「ドライブ・マイ・カー」ほかの成果
	新人賞	ヨシダ ケイスケ 吉田 恵輔	映画監督・脚本家	「BLUE/ブルー」「空白」の成果
音楽	大臣賞	ツマヤ ヒデカズ 妻屋 秀和	声楽家	歌劇「ドン・カルロ」ほかの歌唱
	新人賞	ホンジョウ ヒデジロウ 本條 秀慈郎	三味線演奏家	「本條秀慈郎三味線リサイタルⅦ～Ⅸ」の成果
舞踊	大臣賞	ウエノ ミズカ 上野 水香	バレエダンサー	「ボレロ」ほかの成果
		オクムラ コウスケ 奥村 康祐	バレエダンサー	「白鳥の湖」ほかの成果
	新人賞	イザワ シュン 井澤 駿	バレエダンサー	「白鳥の湖」ほかの成果
文学	大臣賞	ナカジマ キョウコ 中島 京子	小説家	「ムーンライト・イン」「やさしい猫」の成果
		ミズバヤシアキラ 水林 章	上智大学名誉教授	「壊れた魂」の成果
	新人賞	ホッタ キカ 堀田 季何	文芸家	堀田季何第四詩歌集「人類の午後」の成果
美術	大臣賞	タカノ リュウダイ 鷹野 隆大	写真家	「鷹野隆大 毎日写真 1999-2021」展の成果
	新人賞	タナベ チクウンサイ 四代 田辺 竹雲斎	竹作家	「北陸工芸の祭典GO FOR KOGEI 2021」展ほかの成果
		ヤマシロ チカヨ 山城 知佳子	映像作家、美術家	「山城知佳子 リフレーミング」展の成果
放送	大臣賞	インヤマ アキ 磯山 晶	プロデューサー	「俺の家の話」の成果
	新人賞	アダチ ナオコ 安達 奈緒子	脚本家	「おかえりモネ」の成果
大衆 芸能	大臣賞	カツラ ナンク 桂 南光	落語家	「らくだ」ほかの成果
		サノ モトハル 佐野 元春	ロック・ミュージシャン	「THE COMPLETE ALBUM COLLECTION 1980-2004」ほかの成果
	新人賞	フジイ カゼ 藤井 風	ミュージシャン	「きらり」「燃えよ」ほかの成果
芸術 振興	大臣賞	カワグチ タカオ 川口 隆夫	ダンサー・パフォーマー	コロナ禍における表現者としての活動
	新人賞	ナカムラ アカネ 中村 茜	パフォーミングアーツ・プロデューサー	「THEATRE for ALL」ほかの成果
評論等	大臣賞	ミウラ アツシ 三浦 篤	東京大学大学院教授	「移り棲む美術」の成果
	新人賞	トヤマ スミオ 遠山 純生	映画評論家	「〈アメリカ映画史〉再構築」の成果
メディア 芸術	大臣賞	コジマ ヒデオ 小島 秀夫	ゲームクリエイター	「DEATH STRANDING DIRECTOR'S CUT」の成果
	新人賞	よしなが ふみ	漫画家	「大奥」「きのう何食べた？」の成果

※敬称略・部門内50音順

令和3年度(第72回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

令和3年度(第72回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	竹本 千歳太夫	竹本千歳太夫氏は、文楽公演「ひらかな盛衰記」神崎揚屋の段において、傾城梅ヶ枝が、恋人の出陣のためなら自分は地獄に落ちてもいいとの必死の一念を、魂が嘔きこぼれるような迫力ある語りで描き、物語の奇跡を観客に信じさせる見事な浄瑠璃を披露した。ほかにも「生写朝顔話」宿屋の段、「彦山権現誓助剣」毛谷村の段などで芸の幅広さを示した。深い解釈、高い技量に近年は風格も加わり、その語りは義太夫節の神髄に迫るものである。
演劇	マキノ ノゾミ	文学座に書き下ろした「昭和虞美人草」は、夏目漱石が明治末期に書いた小説「虞美人草」をベースに、時代を戦後の高度経済成長が曲がり角を迎えた1973年に置き換えた戯曲だ。マニャックなロック雑誌を作る若者たちが、理想と現実のはざままで葛藤しながら大人へと成長していくさまが、軽妙な筆致で描かれる。国家や文明への深く鋭いまなざしは普遍性を帯び、原作でも有名な「真面目になれ」の説教は、混迷するコロナ禍の現代に刺さる名場面となった。
映画	江川 悦子	俳優の全身、一部を実際に変身させる特殊メイクを立体美粧と命名した江川悦子氏は、アメリカで学んだ後昭和61年に開業し、以来35年を超えて監督らの強い信頼を得ている。令和2年「日本独立」でまさに俳優を役に変身させた氏は、令和3年「信虎」では特殊メイク・スーパーバイザーとして、時代劇のかつらにラテックス製の羽二重を改良使用し、デジタル撮影に比べると同時に、装着によるストレスを無とする画期的な技法を結実させ、時代劇撮影に革命をもたらした。同年「マスクレード・ナイト」では主要キャストの仮面をデザイン・型取りして作成した。
映画	濱口 竜介	濱口竜介氏は非職業俳優の起用やドキュメンタリー作品製作などを経て、独自の演出方法を確立している。令和3年には2作品が公開され、「偶然と想像」では人間関係の中に潜む驚きを皮肉と愛を込めて活写し、「ドライブ・マイ・カー」では映画と小説と演劇の三位一体を実現させながら、映画のリアリズムを高度な次元に引き上げた。それぞれベルリンとカンヌという重要な国際映画祭で受賞しており、現在の日本映画を牽(けん)引する存在である。
音楽	妻屋 秀和	妻屋秀和氏は日本を代表するバス歌手である。恵まれた才能とヨーロッパの歌劇場で培った豊かな経験を生かしつつ、長年、新国立劇場をはじめとする多くの舞台で常に存在感を示し、公演の成功に貢献してきた。令和3年はとりわけ活動が顕著で、コロナ禍で来日しなかった外国人歌手に代わっていくつかの主役級の役も高水準でこなし、その実力を広く再認識させた。なかでも新国立劇場「ドン・カルロ」におけるフィリッポ二世の圧倒的な歌唱は印象的であった。
舞踊	上野 水香	類いまれなプロポーションと柔軟性、個性的な面差しの上野水香氏は、牧阿佐美バレエ団においてのデビュー当初から東京バレエ団プリンシパルである現在に至るまで、常に第一線で活躍している。令和3年は、長年踊ってきたベジヤール振付「ボレロ」で新境地を拓(ひら)き、アロンソ振付「カルメン」の表題役をより深い表現力で演じ、「海賊」のメドーラ役では華やかな存在感で全幕のドラマを牽(けん)引。トップ・プリマの圧倒的な輝きを放ち続けた。

令和3年度(第72回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	奥村 康祐	奥村康祐氏は、国際コンクールでの入賞を重ねた後に新国立劇場バレエ団に入団。バレエ芸術の根幹をなす品位ある立ち居振る舞いにとりわけ優れ、新国立劇場バレエ団の主要なレパートリーに次々と主演してきた。今年度は古典名作「白鳥の湖」「ライモンダ」で踊りのスケールや力強さ、心理表現に著しい進境を示し、現代作品においても繊細な感性の光る名演が続いた。日本を代表するダンスール・ノーブル(貴公子ダンサー)の一人であり、さらなる活躍を期待させる。
文学	中島 京子	中島京子氏は、これまで多彩な題材に取り組み数多くの上質な作品を発表してきた。本年刊行された「ムーンライト・イン」「やさしい猫」は、ともに親しみやすい文体ながらも、介護、認知症、家族関係、外国人などを巡(めぐ)る令和の日本の抱えた現実を取り上げ、問題提起していく姿勢が頼もしい。人生の岐路に立った人々の再生、あるいは一人の少女の成長の物語を、ときにユーモア、ときに不可思議な色合いを交えて描き出す卓越した筆致と作者の温かな眼(まな)差しは、多くの読者に希望を与えるものだろう。
文学	水林 章	物語は第二次世界大戦直前の東京で始まる。孤児となった少年・礼は、縁あってフランスで育ち、優秀な弦楽器職人となった。彼が胸に秘め続けた願いは、かつて無残に壊された父の遺品のヴァイオリンを修復することだった。楽器が本来の響きを取り戻すとき、音楽への愛で結ばれた人々の絆(きずな)も時代を超えて蘇(そ)生する。水林章氏は本書をフランス語で書下ろし、フランスで好評を博したのち自ら日本語に訳出した。清冽(れつ)な傑作の見事な越境を寿(ことほ)ぎたい。
美術	鷹野 隆大	鷹野隆大氏は日本の男性写真家としては珍しく、ジェンダーやセクシュアリティを攪拌(かくはん)する作品で知られる。しかしそれは彼の試みの一部分にすぎない。国立国際美術館で開催された「鷹野隆大 毎日写真1999-2021」展は、写真という媒体の可能性と限界に挑戦するこの作家の力量を余すことなく伝える機会となった。1998年から続けている「毎日写真」を中心に、日本の無秩序な町並みや影を映した作品等、テーマも様式も多岐に及ぶが、一貫して制度化された眼(まな)差しについて思考し、それに対する疑問を提示し続けている。
放送	磯山 晶	磯山晶氏は主に脚本家の宮藤官九郎氏とのコンビで「木更津キャッツアイ」「タイガー&ドラゴン」といった作品でテレビドラマ界を牽(けん)引してきた。常に観(み)たことのない面白さに溢(あふ)れたドラマを制作し、次に何を企(たくら)んでいるのか楽しみな制作者であり、若いドラマ制作者にとっては憧れの存在である。令和3年1月期に放送された「俺の家の話」は、プロレス、能、という連続ドラマではなかなか登場しない素材と、重くなりがちな「親の介護」というテーマを見事に融合させ、しかも笑えて泣けて心に刻まれる名作へと昇華させた。このドラマを企画、成立させ、令和3年を代表する人気ドラマとして世に送り出した氏の功績を称(たた)えたい。
大衆芸能	桂 南光	還暦からの10年間、江戸落語を上方流に仕立て直したり、従来のオチを時代の変化を鑑み改作したりと、納得のいく南光落語を構築。古希記念の全国ツアー楽日で披露した「らくだ」は、その集大成とも言える。性善説を下敷きに、生きることの刹那や人情の機微を押しつけがましくない描写で体現しながらも、観客の心に温(ぬく)もりを残す。緩急の効いた滑稽噺から、人情味ある噺までを、上方の匂いと共に伝える噺の匠は充実の時を迎えている。

令和3年度(第72回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
大衆芸能	佐野 元春	1980年にデビューしてから40年以上。コロナ禍にあっても活動への熱意を失うことなく、現役感たっぷりに新曲リリースを重ね、日本武道館や大阪城ホールなど大会場も含むライブにも挑み続けた。と同時に、デビュー以来24年にわたったエピックレコード在籍時の全アルバムを網羅する充実のCD29枚組「THE COMPLETE ALBUM COLLECTION 1980-2004」も編纂。いつの時代も変わらず、鋭い眼(まな)差しと瑞々(みずみず)しい感性で日本のポップ音楽界に有効な方法論を提示し続けてきた自身の「現在」と「過去」を集大成してみせた。
芸術振興	川口 隆夫	COVID-19感染拡大により舞台公演の多くが中止された令和3年、川口隆夫氏は「TOKYO REAL UNDERGROUND」、「INOUTSIDE」フェスティバルのディレクターや共同企画者を務めた。それらは地下空間での通常ではあり得ない演出、国際的なアーティストや異なる分野の研究者たちを交えたトーク、ワークショップなどを通してパンデミックという非常事態をポジティブに捉え直す貴重な機会となった。それはまた生命としての身体を見つめ、逃れがたい病や死を「表現」によって受け止めようとする芸術の在り方を問い直す、ダンスというジャンルを超えた表現者としての挑戦そのものであった。
評論等	三浦 篤	19世紀後半から日本美術に触発されて、欧米各国に広範に波及したジャポニスム。一方、明治日本には西欧、とりわけ西洋画においてはフランスから美術文化が流入する。フランス近代美術史研究の第一人者三浦篤氏は、本書において、長年の研究を土台に、双方向的な視点から移植と選択の摂取を論じる。卓抜な三部構成、すなわちフランスと日本、そして両者の架け橋となった画家コランを間にはさんで考察し、これを説く的確な文体により秀逸な結実をもたらした。
メディア芸術	小島 秀夫	「DEATH STRANDING」は、規模の大きさ、作り込みの深さ、クオリティの高さは、もちろんだが、その上で作家性が発揮された「顔」の見える作品であることに感動するのだ。大災厄によって崩壊したアメリカを舞台に「運び屋」となって分断された社会を繋(つな)げていくというミッションと、オープンワールド上で見えない誰かと間接的に協力するメカニクス。インタラクションのダイナミズムを、戦いではなく、繋がり(ストランド)によって体現させた。1987年の「メタルギア」から一貫して、既存のセオリーを超えるゲームでありながらゲームでのみ可能な方法で世界を示し続けてきた小島秀夫氏だからこそ到達できた境地である。

令和3年度(第72回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	尾上 松緑	松羽目物の所作事「土蜘蛛」は、祖父も父も当たり役とした、いわば家の芸である。五月歌舞伎座における所演は、前半の陰鬱な雰囲気の出にすぐれ、松羽目物の格調を踏み外さない的確な舞踊表現、後半の怪異の表現のスケールでも、大きな進歩のあとをみせた。「太刀盗人」の巧まざるおかしみ、「人情断文七元結」の男気の表現にも進境がみられる。古典歌舞伎に軸足を置いて、流行に左右されない篤実な歩みも注目に値する。修行の成果はすでに中堅の位置に迫るが、さらなる結実を祈念して、これまでの精進を讃(たた)えたい。
映画	吉田 恵輔	吉田恵輔氏は、これまで注目すべき作品を手がけてきた映画監督である。令和3年の「BLUE／ブルー」は負け続けながらも挑戦するボクサーを描き、また「空白」は万引きを疑われて事故死した娘への思いを抱く父親の不条理な感情を描いて、その優れた資質を示した。ともにオリジナル脚本と意欲的な演出によって、ともすれば事の顛(てん)末の白黒を簡単に定めがちな社会のあり方を問いながら、主人公たちの生き方を感情の機微を通してリアルに描き出した刺激的な創作活動は評価に値する。
音楽	本條 秀慈郎	本條秀慈郎氏は、三味線演奏家としてすでにジャンルを超えた活動を続けているが、特に令和3年の「微かに…高橋悠治と三味線三夜」と題したりサイタルにおいて非常に内容の濃い演奏を聴かせた。3夜(昼夜同演目の6公演)にわたる演奏は、独奏曲のほか、各回に義太夫三味線、京都の柳川三味線、ピアノとの共演というバラエティに富んだ演目を含み、これまでに磨き上げられてきた技量は、三味線という楽器に希望に満ちた未来を拓(ひら)いた。
舞踊	井澤 駿	井澤駿氏は、平成26年新国立劇場バレエ団に入団、早々に主役デビュー。令和3年もダンスール・ノーブルタイプのダンサーとして、フレッシュな感性、高度のテクニックと表現力を生かし、5作品(配信含む)に主演し成果を上げた。特に「白鳥の湖」ではエレガントで品格ある技術と自然体の演技で、王子の愛と憂いをドラマチックに演じ切った。古典バレエから現代バレエまでレパートリーの幅を拡(ひろ)げており、今後更なる飛躍が期待される。
文学	堀田 季何	〈戦争と戦争の間の臃かな〉〈斑蝶斑蛾斑蝶斑〉。堀田季何氏の俳句は極楽の文学、花鳥諷詠へのアンチテーゼである。独自の毒の花に匂い立つ夢魔の香は、やがて痛切に哀(かな)しい。なぜならその花は鉱石で出来ているから。本句集は自己陶醉に陥らず、認識を研ぎ澄ました批評哲学の結晶である。〈人間を乗り継いでゆく神の旅〉〈吾よりも高きに蠅や五六億七千萬年(ころな)後も〉。人間の卑小さへの洞察が悠久の文明批評になった句群は、芭蕉が拓(ひら)いた地平を抜け、アフターコロナの新たな世界像を提示している。
美術	四代 田辺 竹雲斎	四代田辺竹雲斎氏は、代々竹工芸を営む家系に生まれ、伝統的な修行を積むことにより、伝統技法を生かした竹工芸の器などの作品を作る。その作品は、伝統的な機能性を追求しながらも、伝統的形からモダンデザインの領域に達し、竹工芸家としても日本を代表する作家となっている。しかし彼は竹工芸家の伝統的な活動の枠を大きく飛び出し、世界中で竹を使った壮大なインスタレーション制作を展開している。その活動は竹工芸家としての領域を超越し、美術家として、更なる新しい領域へ広がりがつある。もしかすると、素材も竹にとどまらず、空間も室内に納まらなくなるにちがいない。

令和3年度(第72回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
美術	山城 知佳子	東京都写真美術館での「山城知佳子 リフレーミング」展は、作家の公立美術館初個展として、2002年の《BORDER》から最新作《リフレーミング》までが展覧された。山城知佳子氏は生まれ育った沖縄の風土と歴史、政治的状况に対峙(じ)し、時に俯瞰(ふかん)的で批評的な視点によって、大胆な物語性が透(ほとぼ)しる映像・写真作品を創出してきた。様々な次元で自覚される境界を、身体感覚に訴えかけて突破しようとする創作は、氏の誠実と力強さとして、説得力をもって評価された。
放送	安達 奈緒子	脚本家・安達奈緒子氏は、これまでも「透明なゆりかご」、「きのう何食べた?」、「サギデカ」などの繊細で情感豊かな脚本により、高く評価されてきた。NHK連続テレビ小説「おかえりモネ」では、安易な相互理解や主人公のわかりやすい成長を描くのではなく、東北と東京を舞台に、非当事者が被災者に寄り添うとはどういうことかを誠実に突き詰めた脚本を執筆し、東日本大震災から十年という節目にふさわしい、秀逸なドラマを生み出した。
大衆芸能	藤井 風	2010年、12歳の時から動画配信サイトに投稿し続けてきたピアノ弾き語り映像が話題を集めデビューに至った経緯も含め、まさに今どきの新人音楽家。自作、カバーにこだわらず、いい曲を豊かな歌心と優れた技能でまっすぐ聞き手に伝えるという、基本的な、しかし誰もがふと忘れがちなポップ音楽の美学を今改めて、フレッシュな感性で全うしようとする姿勢が爽快だ。2021年には動画サイト登録者も100万人超え。無観客野外ライブの全世界生中継や全国ツアーも成功。NHK紅白歌合戦への出演も好評を博した。複雑化したシーンに文字通り新風を吹き込む存在として評価したい。
芸術振興	中村 茜	中村茜氏は、岡田利規、矢内原美邦らアーティストらと演劇・舞踊・美術等のジャンルを越境するプロジェクトを仕掛けてきた。令和3年は、「誰もが、いつでも、どこからでも繋がれる劇場」をとバリアフリー型動画配信事業THEATRE for ALLを立ち上げ、またTrue Colors Festivalにおいてダイバーシティをテーマに多国籍のアーティストや多様なシニアたちとドキュメンタリー演劇に挑むなど、コロナ禍でも舞台芸術のすそ野の拡大に果敢に取り組む姿勢を評価し今後のさらなる活躍を期待したい。
評論等	遠山 純生	アメリカ映画史といえば、巨匠から巨匠へという峰を伝うのが定石だが、遠山純生「〈アメリカ映画史〉再構築」は、意識的な現実性の探求という新たな切り口から見直す力作である。出発点は1920年代の社会的リアリズムの写真家と映画人が開発し共有したモンタージュの技法で、記録映画と実験映画、テレビやニュースを横断しながらスピルバーグらの大型SF映画までたどり着く。撮影や照明機材の開発とその利用技術の考察も鋭い。結論部の弱さが惜しまれるが、それは次に克服されるとの期待をこめて新人賞を授与する。
メディア芸術	よしなが ふみ	「大奥」は江戸時代の男女の社会的役割を逆転し、時代劇をパロディ化したSF大作。令和3年2月完結した。「きのう何食べた?」は、青年誌でゲイカップルの日常をあたりまえのように描き続けてきた連載中の作品。ともに、時に鋭く時に優しくジェンダーロールへの問いを投げかけ、固定化した社会的価値観の変化を促す役割を果たしている。よしながふみ氏が私たちに示し続ける新しい地平を高く評価し、文部科学大臣新人賞を贈賞する。

令和3年度(第72回)芸術選奨
選考経過

令和3年度(第72回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	<p>令和3年も新型コロナウイルスの感染拡大で演劇界は公演中止、中断など前年同様に大きな影響を被った。年後半にかけワクチン効果などにより公演が集中的に行われた。</p> <p>経過は次の通り。選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として13名、文部科学大臣新人賞候補者として14名の推薦があり、伝統芸能から現代演劇の劇作家、演出家、俳優等幅広い候補が並んだ。第一次選考審査会で、文部科学大臣賞には伝統芸能分野2名を含む5名、文部科学大臣新人賞は3名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績について多様な角度から議論が重ねられた。文部科学大臣賞は、文楽「ひらかな盛衰記」「神崎揚屋の段」で恋人の出陣に臨んだ傾城梅ヶ枝の悲痛な思いを全身全霊で深々と表現した人形浄瑠璃文楽太夫・竹本千歳太夫氏が、切場語りたるべき力を発揮したとして審査員多数から高い評価を得て選出された。続いて文学座公演「昭和虞美人草」で原作を現代のロック好きの若者たちに置き換え、歴史から普遍性を引き出しながらナチュラルな作劇で観客をひきつける作品を書いた劇作家・マキノノゾミ氏を選出した。文部科学大臣新人賞は、実績と将来性をどう評価するかを基準に伝統芸能の演者と現代演劇の演出家が有力候補として残り容易には決めがたかった。こうした中で5月の歌舞伎座・舞踊劇「土蜘蛛」で凄愴な存在感と骨太な芸風を示した演技力が着実に古典歌舞伎に専心してきた成果として高く評価され、今後の舞台への期待も相まって歌舞伎俳優・尾上松緑氏の選出となった。</p>
映画	<p>映画部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として6名、文部科学大臣新人賞候補者として8名の推薦があった。第一次選考審査会では、それぞれの候補者の活動実績と、選考審査員及び推薦委員から提出された推薦理由に基づいて活発な議論がなされた。その結果、文部科学大臣賞候補者4名、文部科学大臣新人賞候補者4名に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、各選考審査員が、自分が推選する候補者について補足説明を行うとともに、それ以外の候補者についても所見を述べる形で、様々な角度から踏みこんだ議論が重ねられ、文部科学大臣賞には、妻を失った男の喪失と希望を、優れた脚本力と豊かな映画表現で再生への道を力強く描いた「ドライブ・マイ・カー」ほかの成果で映画監督の濱口竜介氏と、「信虎」「マスカレード・ナイト」での登場人物像造形に於(おい)て、特殊メイクにとどまらない役割を担い、常に人間の自由なイメージを次元を超えて形にする、特殊メイクアーティストの江川悦子氏を選出した。</p> <p>文部科学大臣新人賞には、「BLUE/ブルー」「空白」でリアルな人間描写を極めつつ、人間性への信頼を示し、それぞれに高い完成度を示した映画監督の吉田恵輔氏を選出した。</p>
音楽	<p>令和3年、音楽界は、前年より引き続き、とりわけ厳しい環境に置かれた。その困難を乗り越え、絶えることなく続けられた芸術家たちの意欲溢(あふ)れる活動が、社会に明るい灯をもたらすところとなり、また我が国の「文化力」の何よりの証(あかし)ともなったことについては、改めていうまでもなく、特筆に値する。</p> <p>選考審査員及び推薦委員からは、文部科学大臣賞候補として合わせて10名、文部科学大臣新人賞候補として11名の推薦があった。第一次選考審査会においては、各委員提出の推薦書面の検討に加え、選考審査員による厳正なる審査の末、それぞれ3名が最終候補に絞られた。</p> <p>各候補の業績の確認、精査を経て開かれた第二次選考審査会では、活発なる議論が交わされたのち、文部科学大臣賞1名、文部科学大臣新人賞1名がいずれも全会一致で選出された。</p> <p>文部科学大臣賞の妻屋秀和氏は、既に長年にわたり我が国を代表するバス歌手として活躍を続けてきた音楽家だが、ことに令和3年は、オペラの舞台をはじめ、演奏会においても、幅広い分野で大きな成果をあげたことが高く評価された。また、文部科学大臣新人賞の本條秀慈郎氏は、自らの連続リサイタルにおいて、我が国の音楽界のみならず、国際的なコンテクストに照らしても傑出した存在である高橋悠治という音楽家に真正面から向き合い、その音楽の核心部分に見事にスポットを当てた圧倒的な成果が目をつけた。</p>

令和3年度(第72回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
舞踊	<p>舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として17名、文部科学大臣新人賞候補者として16名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、さらに審議を深めて、まず文部科学大臣賞にふさわしい候補者の中で推薦の多かった上野水香氏が満場一致で文部科学大臣賞の1名として決まった。「ボレロ」で見せた特に卓抜した演技力が高く評価された。続いて、新国立劇場公演「白鳥の湖」のジークフリード役を演じた奥村康祐氏が、格調高い立ち居振る舞いに優れた演技力は文部科学大臣賞にふさわしいと高い評価を得て選出された。</p> <p>文部科学大臣新人賞では、同じく新国立劇場公演「白鳥の湖」のジークフリード役を演じた井澤駿氏の高度なテクニックと鋭敏な感性が高く評価され、氏への贈賞が決まった。</p> <p>令和3年はバレエが特に素晴らしく、結果として文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞いずれもバレエからの選出になったが、コロナ禍という困難に満ちた状況の中で尽力している他ジャンル関係者にも引き続き頑張っていたいただきたい。</p>
文学	<p>文学部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として14名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は4名(小説家3名、俳人1名)、文部科学大臣新人賞は5名(小説家3名、詩人1名、俳人1名)に候補者が絞られた。</p> <p>第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。</p> <p>文部科学大臣賞には、中島京子氏、アキラ・ミズバヤシ氏が選ばれた。中島氏の「ムーンライト・イン」は、元ペンションでの男女4人の共同生活を、あたたかみのある筆致で描く。同じ作者の「やさしい猫」は、スリランカ人の男性と日本人の女性が築いた家庭が、困難な状況に追い込まれる。彼らをとりまく人たちとともに社会意識にめざめる過程を、ていねいに描く感動作。多彩な現実に向き合う作者の姿勢が、高く評価された。</p> <p>ミズバヤシ氏の「壊れた魂」は、作者・水林章氏による邦訳。東京とフランスを舞台に、歴史の闇のなかを生き抜く人々の心の絆(きずな)をみずみずしい文章で描き出した。</p> <p>文部科学大臣新人賞には、堀田季何氏の句集「人類の午後」が選ばれた。多方向に伸びる野趣にみちた言語は、強い印象を残した。</p>
美術	<p>美術部門は、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者15名、文部科学大臣新人賞候補者14名が推薦された。第一次選考審査会では、選考審査員が推挙した作家について推薦理由を述べ、さらに全ての候補者について作品及び推薦理由を慎重に審議した。その結果、文部科学大臣賞は7名、文部科学大臣新人賞は8名の候補者に絞り込んだ。第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について審議した。その結果、文部科学大臣賞3名、文部科学大臣新人賞3名の候補者に絞り、最終的に投票によって決定した。選考過程で、令和3年度の文部科学大臣新人賞候補は甲乙つけがたく、文部科学大臣賞よりもむしろ文部科学大臣新人賞2名とするほうが適当ではないかとの意見が出され、満場一致で賛同された。その結果、文部科学大臣賞は鷹野隆大氏、新人賞は山城知佳子氏ならびに田辺竹雲齋氏を決定した。大臣賞の鷹野氏は「鷹野隆大 毎日写真1999-2021」展(国立国際美術館)、新人賞の山城氏は「山城知佳子 リフレーミング」展(東京都写真美術館)、田辺氏は「北陸工芸の祭典 GO FOR KOGEI 2021」展ほかの成果が高く評価された。</p>

令和3年度(第72回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
放送	<p>放送部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として16名、文部科学大臣新人賞候補者として10名の推薦があった。第一次選考審査会では活発な議論が交わされ、文部科学大臣賞候補者を6名、文部科学大臣新人賞候補者を4名に絞った。</p> <p>第二次選考審査会では候補者の作品を再視聴するなどして臨んだ各選考審査員から文部科学大臣賞の候補者を推挙してもらった。その結果、選考審査員全一致でTBSテレビプロデューサーの磯山晶氏を文部科学大臣賞に決定した。</p> <p>「俺の家の話」は数多くの作品を共に作ってきた宮藤官九郎氏脚本、長瀬智也氏主演の連続ドラマであるが、磯山氏がプロデュースしてきたなかで最高傑作であるとする選考審査員からの賞賛の声もあった。</p> <p>文部科学大臣新人賞の第二次選考審査では、異なる専門性をもった候補者が鼎立となる形となって選考が難航した。その中でひとり2票をもって投票することで事態は解決し、文部科学大臣新人賞には脚本家の安達奈緒子氏を選出した。脚本を担ったNHK連続テレビ小説「おかえりモネ」は東日本大震災で心の傷を負ったヒロインが気象予報士となってまた故郷を新たな目で見直していくという物語である。言葉少ないヒロインの内面を描き切った筆力が高く評価された。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者14名、文部科学大臣新人賞候補者11名の推薦があり、第一次選考審査会で文部科学大臣賞は3名、文部科学大臣新人賞は6名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>今回は寄席演芸や大衆音楽のほか、お笑いパフォーマンスやジャズ音楽家など多種多様な分野からの候補者が揃ったため、第二次選考審査会での議論は例年以上に白熱。音源、映像等の素材をできる限り視聴した上、無観客ライブの配信など、コロナ禍における公演の実態と有効性などについても、突っ込んだやりとりがあった。その結果、文部科学大臣賞に40年に及ぶ音楽活動の集大成である29枚組の大作アルバムを完成し、さらには有観客ライブで精力的なパフォーマンスを見せた佐野元春氏と、さらにもう一人、古希記念の全国公演でたゆまぬ落語の研鑽の成果を示した上方落語の雄・桂南光氏が選ばれた。文部科学大臣新人賞は文部科学大臣賞以上の接戦となり、いずれ劣らぬ有力候補が並ぶ中、演奏と創作の両面で類い稀(まれ)な音楽センスを見せた藤井風氏が選ばれた。</p>
芸術振興	<p>芸術振興部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会において、選考審査員は芸術振興部門の趣旨にふさわしい候補者を、文部科学大臣賞から4名、文部科学大臣新人賞から4名に絞り込み、第二次選考審査会に臨んだ。いずれもコロナ禍における取組みがこれまで以上に顕著であったが、慎重な議論の結果、文部科学大臣賞にダンサーの川口隆夫氏、文部科学大臣新人賞にパフォーマンス・プロデューサーの中村茜氏を選出した。</p> <p>「コロナ禍における表現者としての活動」ほかのイベントのディレクターや共同企画者を務めた川口氏は、コロナウイルスを巡(めぐ)る差別や偏見が進む中で、ウイルスが単に敵ではなく、人類と共生してきた歴史に着目した対談やパフォーマンスを行うなど、ダンスという分野を超えた取組みが評価された。一方、分野を越境するプロデュースを精力的に仕掛けてきた中村氏は、動画配信事業「THEATRE for ALL」を立ち上げ、多言語対応や手話通訳、バリアフリー字幕など「誰もが、いつでも、どこからでも繋がれる劇場」の実現に尽力した点が評価された。</p>

令和3年度(第72回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
評論等	<p>評論等部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として20名、文部科学大臣新人賞候補者として13名が推薦された。第一次選考審査会では、推薦書類の内容を踏まえて慎重に審議した結果、文部科学大臣賞については6名、文部科学大臣新人賞については2名の候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、各候補者の著作をめぐって活発な議論を交わした結果、文部科学大臣賞については、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのフランスと日本における美術思潮をめぐり、両国間の相互的な交流の様相を多角的に描き出した「移り棲む美術 ジャポニスム、コラン、日本近代洋画」を著した三浦篤氏が多くの選考審査員の評価を得て選出された。文部科学大臣新人賞については、同賞にふさわしい候補者を総合的に検討した上で、従来のアメリカ映画史では論じられることが少なかった幾多の事象を取り上げて興味深い論考を展開した「〈アメリカ映画史〉再構築 社会派ドキュメンタリーからブロックバスターまで」の遠山純生氏が選出された。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として17名が推薦された。第一次選考審査では各ジャンルの選考審査員がそれぞれの作品の情報や推薦理由を共有し、この時代に及ぼした影響、それぞれのジャンルでの役割などを中心に多岐にわたる議論を行い、文部科学大臣賞を11名から4名、文部科学大臣新人賞を17名から7名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査ではさらに広く深い議論が行われ、最終的に文部科学大臣賞としてはゲーム部門から分断された世界でモノを運ぶことによって人々をつなぐ画期的なゲーム「DEATH STRANDING DIRECTOR'S CUT」を制作した小島秀夫氏がその卓越した作家性、高い技術、テーマの今日性などから選ばれた。また文部科学大臣新人賞には早くからジェンダーに関わるテーマをとりあげ、徳川幕府の将軍を女性にした歴史漫画「大奥」を完成させ、またゲイカップルの日常を描いた「きのう何食べた？」などを発表し続けているよしながふみ氏が選ばれた。</p>

芸術選奨実施要項

昭和	45年	5月13日
文化庁長官	裁定	
一部改正	平成11年	5月13日
一部改正	平成13年	1月6日
一部改正	平成15年	4月1日
一部改正	平成16年	4月1日
一部改正	平成19年	12月26日
一部改正	平成24年	4月1日
一部改正	令和3年	5月19日

1 趣旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家、演出家、演技者、舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家、脚本家、撮影者、演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家、指揮者、作曲家、演出家、舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家、演出振付家、舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家、翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家、演出家、演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家、作曲家、演出家、演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家、文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は、文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は、特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので、各部門2名以内（ただし、放送部門、芸術振興部門、メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は、新人の芸術家（個人）を対象とするもので、各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については、原則として対象としない。

4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は、毎年、原則として1月中に行うものとし、選考の対象となる業績は、主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては、これまでの業績に加え、将来性、年齢、他の受賞歴等も勘案して選出する。

5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い、受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため、各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け、選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家、専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日
文化庁次長決裁
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のこと留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
- (2) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
 - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
 - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

令和3年度(第72回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】		【放送部門】	
井上 桂	水戸芸術館 ACM劇場 芸術監督	岡田 恵和	脚本家
小田 幸子	日本大学芸術学部非常勤講師、能狂言研究家	岡室 美奈子	早稲田大学教授、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長
亀岡 典子	産業経済新聞文化部編集委員	菅 好宏	上智大学文学部教授
河野 孝	演劇評論家、文化ジャーナリスト、元日経新聞編集委員	里見 繁	関西大学教授
児玉 竜一	早稲田大学教授	中町 綾子	日本大学芸術学部教授
立花 恵子	演劇評論家	西村 与志木	フリープロデューサー、JCA西村オフィス代表
濱田 元子	毎日新聞論説委員兼芸芸部編集委員	水田 伸生	株式会社日テレアックスオン執行役員
【映画部門】		【大衆芸能部門】	
荒木 啓子	びあフィルムフェスティバルディレクター	大友 浩	演芸研究家、文筆家
勝田 友巳	毎日新聞芸芸部専門記者	川崎 浩	毎日新聞社客員編集委員
滝田 洋二郎	映画監督	長井 好弘	演芸評論家
富山 省吾	映画プロデューサー、日本映画大学理事長	布目 英一	横浜にぎわい座館長・チーフプロデューサー
部谷 京子	映画美術監督	秋原 健太	音楽評論家
村山 匡一郎	映画評論家	古川 綾子	大阪樟蔭女子大学准教授
矢田部 吉彦	前東京国際映画祭ディレクター	松尾 美矢子	演芸ライター
【音楽部門】		【芸術振興部門】	
岡部 真一郎	明治学院大学教授、日本近代音楽館収書委員長	熊倉 純子	東京藝術大学教授
小畑 恒夫	昭和音楽大学客員教授	小林 真理	東京大学教授
加納 マリ	日本音楽研究家	島 敦彦	国立国際美術館館長
谷垣内 和子	(公社)日本芸能実演家団体協議会実演芸術振興部企画室長	武田 和	(公財)川喜多記念映画文化財団代表理事
塚原 康子	東京芸術大学教授	長木 誠司	東京大学大学院教授
中村 孝義	大阪音楽大学理事長、大阪音楽大学名誉教授	二輪 真弘	情報科学芸術大学院大学教授
宮澤 淳一	青山学院大学教授	渡辺 弘	(公財)埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長
【舞踊部門】		【評論等部門】	
稲田 奈緒美	桜美林大学准教授、舞踊評論家	五十嵐 利治	筑波大学特命教授
桜井 多佳子	舞踊評論家	梯 久美子	ノンフィクション作家
長野 由紀	舞踊評論家	武田 潔	早稲田大学教授
平野 英俊	舞踊評論家	樋口 隆一	明治学院大学名誉教授
古井戸 秀夫	東京大学名誉教授	細川 周平	国際日本文化研究センター名誉教授
宮辻 政夫	演劇評論家	前田 恭二	武蔵野美術大学教授
望月 辰夫	日本芸術文化振興会舞踊プログラムディレクター	【メディア芸術部門】	
【文学部門】		佐藤 雅彦	東京藝術大学名誉教授
荒川 洋治	現代詩作家	しりあがり 寿	漫画家
尾崎 真理子	早稲田大学文学学術院教授	原 久子	大阪電気通信大学教授、アートプロデューサー
恩田 侑布子	俳人、文芸評論家	ヤマダ トモコ	マンガ研究者、明治大学米沢嘉博記念図書館スタッフ
小島 ゆかり	歌人	山村 浩二	東京藝術大学教授、ヤマムラアニメーション有限公司代表取締役
篠田 節子	小説家	横田 正夫	日本大学特任教授
野崎 歆	放送大学教授	米光 一成	ゲーム作家
【美術部門】		【部門内五十音順】	
小沢 剛	美術家、東京藝術大学教授		
笠原 美智子	アーティゾン美術館副館長		
柏木 智雄	横浜美術館副館長・主席学芸員		
加藤 泰弘	東京学芸大学教授		
黒川 廣子	東京藝術大学大学美術館長・教授		
鴻池 朋子	アーティスト		
高橋 綾子	名古屋造形大学教授		
坂 茂	建築家、慶應義塾大学教授		
土方 明司	川崎市岡本太郎美術館館長、武蔵野美術大学客員教授		
光田 由里	多摩美術大学教授、美術評論家		

令和3年度(第72回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
あみもと 尚子	東京富士大学教授	あおき 野枝	彫刻家
あらい 浩介	日本児童・青少年演劇劇団協同組合理事、演技集団朗主宰	いまい 陽子	国立工芸館主任研究員
いぬまる 大丸 治	演劇評論家	おぐさ 実子	京都国立近代美術館主任研究員
おほほり 大堀 久美子	編集者	かんばん 神林 菜穂子	ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション主任学芸員
かみぞお 神澤 和明	演劇評論家、演出家	くらた 倉方 俊輔	大阪市立大学大学院工学研究科准教授
かわい 河合 祥一郎	東京大学教授	まじろ 佐藤 卓	グラフィックデザイナー
いで 伊達 なつめ	演劇ジャーナリスト	しよほら 正村 美里	岐阜県美術館副館長兼学芸部長
なかい 中井 美穂	フリーアナウンサー	すぎと 杉戸 洋	美術家、東京藝術大学准教授
はせお 萩尾 瞳	映画・演劇評論家	たむら 田村 麗恵	東京都庭園美術館学芸員
ひろせ 広瀬 依子	追手門学院大学国際教養学部講師	つちほし 土橋 靖子	書家
【映画部門】		【放送部門】	
あべ 阿部 久瑠美	鎌倉市川喜多映画記念館学芸員	ないとう 内藤 礼	美術家
いしが 石坂 健治	東京国際映画祭シニア・プログラマー	なが 永田 晶子	美術ジャーナリスト
いわなみ 岩波 律子	岩波ホール支配人	ほさか 保坂 健二郎	滋賀県立美術館ディレクター(館長)
うらがわ 宇田川 幸洋	映画評論家	みなかわ 皆川 明	デザイナー
おお 識訪 敦彦	映画監督、東京藝術大学大学院教授	やまぐち 山口 洋三	福岡市美術館学芸員
ちゅうじょう 中条 省平	学習院大学教授	【放送部門】	
のむら 野村 正昭	映画評論家	あべ 安部 裕	日本大学芸術学部教授
ほまた 浜田 毅	日本映画撮影監督協会理事長	いもろ 伊藤 純	プロデューサー
ふじおか 藤岡 朝子	ドキュメンタリー・ドリームセンター代表、山形国際ドキュメンタリー映画祭理事	いのうえ 井上 由美子	脚本家
やまだ 山田 恵美	読売新聞文化部記者	こうたけ 上滝 徹也	日本大学名誉教授
【音楽部門】		まかもと 坂元 裕二	脚本家
こうの 河野 典子	音楽評論家	さとう 佐藤 一彦	フリーランスプロデューサー、プランナー
くに 國土 潤一	声楽家、合唱指揮者、音楽評論家	すずき 鈴木 嘉一	放送評論家
しいな 椎名 亮輔	同志社女子大学教授	にわ 丹羽 美之	東京大学教授
たかたけ 高島 整子	音楽プロデューサー	みなもと 源 孝志	脚本家、演出家
たけうち 武内 恵美子	京都市立芸術大学准教授	やじま 矢島 良彰	プロデューサー
ちば 千葉 優子	宮城道雄記念館資料室室長	【大衆芸能部門】	
のぐわ 野川 美穂子	邦楽研究家	あいば 相羽 秋夫	演芸評論家
のびら 野平 一郎	東京藝術大学名誉教授 東京音楽大学教授	かより 香取 良彦	東京藝術大学非常勤講師
ふなき 船木 篤也	音楽評論家	ささき 佐々木 透子	intoxicate編集長
よこはら 横原 千史	音楽評論家、兵庫県立大学講師	さとう 佐藤 友美	「東京かわら版」編集長
【舞踊部門】		なかむら 中村 真規	演芸プロデューサー、江戸文字書家
あいら 藍本 結井	舞踊評論家	ひたか 日高 美恵	演芸ライター
あべ 阿部 さとみ	舞踊評論家	まえだ 前田 憲司	芸能史研究家
いづか 飯塚 友子	産経新聞記者	むらい 村井 康司	音楽評論家、尚美学園大学講師
いづみ 猪崎 弥生	お茶の水女子大学名誉教授放送大学東京足立学習センター所長	あぶら 油井 雅和	毎日新聞記者
おみ 岡見 さえ	舞踊評論家、共立女子大学准教授	わたなべ 渡邊 寧久	演芸評論家
【舞踊部門】		【芸術振興部門】	
かづ 唐津 絵理	愛知県芸術劇場エグゼクティブプロデューサー	あい 衛 紀生	可児市文化創造センターala シニアアドバイザー兼まち元氣そうだん室長
こが 古賀 司郎	古典芸能評論研究	かい 甲斐 賢治	せんだいメディアテーク アーティストック・ディレクター
しんとう 新藤 弘子	舞踊評論家	かけお 掛尾 良夫	田辺・弁慶映画祭プログラム・ディレクター、映画ジャーナリスト、プロデューサー
すずな 松 あつこ	舞踊ジャーナリスト	【メディア芸術部門】	
わたなべ 渡辺 真弓	舞踊評論家	いのうえ 井上 明人	立命館大学専任講師
【文学部門】		うかわ 宇川 直宏	現在美術家
あんどう 安藤 礼二	多摩美術大学図書館長・教授	うちだ 内田 まほろ	キュレーター、日本科学未来館スーパーバイザー
くりき 栗木 京子	現代歌人協会理事長	あふね 木船 園子	東京工芸大学教授
たなか 田中 和生	文芸評論家、法政大学文学部教授	くどう 工藤 健志	青森県立美術館総括学芸主幹
はちの 蜂飼 耳	詩人、立教大学教授	じょう 城 一裕	九州大学大学院芸術工学研究院准教授
まさき 正木 ゆう子	俳人	なかがわ 中川 大地	評論家、編集者
まついえ 松家 仁之	小説家	にしはら 西原 麻里	名古屋短期大学現代教養学科学科准教授
まつなが 松永 美穂	早稲田大学文学学術院教授	みづうみ 三浦 知志	尚綱大学現代文化学部准教授
みやうち 宮内 勝典	作家、小説家	【部門内五十音順】	
よし川 吉川 宏志	歌人		
よし田 吉田 修一	作家		